一般の部　優秀賞

（講評：後藤 文男 氏）

「漢字を学び書字するって楽しい！」をめざして

福井県　福井市越廼小学校教頭
蓑輪　潤子 氏

白川文字学を活用して漢字を学ぶことは、児童の知的好奇心をくすぐり探究心をもたせることができるため、本県が推進する「楽しむ教育」の一つと考えられる。そこで、書写の授業の中で無理なく継続的に白川文字学を活用しながら漢字を学習する場面を模索するとともに、児童が意欲的に漢字の成り立ちを学習し、漢字や古代文字にそして書字することにも興味をもち意欲的に「楽しみながら」学習する授業を実践した。

まずは、全学年を通して、系統的にまた見通しをもって取り組むことができるよう「小学校書写における漢字学習題材掲載一覧（光村図書）」を作成した。これをもとに全学年で、自分の名前の漢字等成り立ちとその古代文字を書字する楽しさを味わった。

その他、校内の掲示板で季節や時事に関する漢字を紹介したり、お誕生日カードで名前の漢字の成り立ちを紹介したりするなど、児童や大人が興味を持つような取組を行ってきた。

これらの経験が、児童の長い生涯学習の一助、きっかけとなってくれると嬉しい。

講評　書写の授業と漢字の成り立ちを巧みにコラボさせながら、児童が生き生きと楽しんで学習している姿が目に浮かぶ、日々の何気ない授業の中にキラッと光る実践であり、自然体の中に質の高さを感じられる実践として高く評価された。第２回の優秀賞受賞者だが、さらに新しい可能性に挑戦されている姿に大いに励まされ、力を得た。

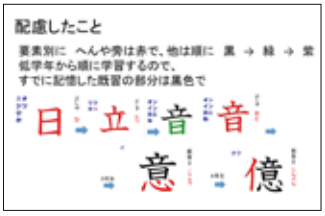
―僕だって私だってアプリがあれば漢字が覚えられるよ―

佐賀県　佐賀県立盲学校講師
福田由美子 氏

文字を書いたことがない、自分の名前も書いたことのない重度の知的障がいの生徒が入学してきた。手だてを工夫してひらがなが書けるようになったが、漢字も書けるように漢字アプリを作成した。顕著な効果が出たので書字困難な生徒にも役に立つと考えた。

作成に当たり配慮したことは、①一画一画書き順に従って線が出てくること②偏や旁を赤色で作成したこと③漢字の要素を同じ色で示すこと④既習の文字は黒色にすること⑤漢字の色別の要素を口誦しながら見ることである。（漢字アプリ作成に当たって、マイクロソフト社の書き順アプリを活用させていただいた）

アプリを使って指導した結果、重度の知的障がいの生徒は、文字をもったことで指導の内容がわかり音楽の才能が開花、佐賀県高校生ピアノコンクールで金賞を受賞した。読めるけれど書けなかったディスグラフィア（書字障がい）の生徒は、他教科の成績も上がり、自己肯定感が生まれ、少年の主張佐賀県大会で 10 傑に選ばれた。



講評　第２回に特別奨励賞を受賞されているが、今回「書字障がい」や「知的障がい」の児童生徒に自作の漢字アプリを使って取り組まれた実践が子どもたちに生きる自信や希望を持たせる上でも大きな意義を持つ実践だと高く評価された。

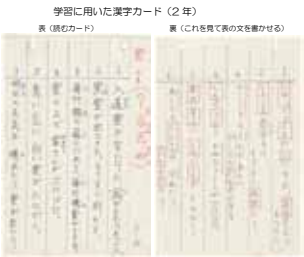
一般の部　特別奨励賞

（講評：後藤 文男 氏）

文章を基礎に置いた読み優先の漢字教育

京都府　大津少年センター思春期相談員
井上　知子 氏

長男が小学校入学後平仮名を扱えない事が判明。学校では平仮名から漢字へ、新出漢字は読み書き同時進行・一斉教育で進むためとても心配した。一方で、記憶はエピソードが基礎にあり感情が動くと深く刻まれる。それなのに記号である平仮名から教え、意味に少し触れただけで漢字単体を何度も書かせるのは記憶のメカニズムから外れている。そのため、エピソードがありイメージの湧く文を用いて行うのが最善と考えた。大人になって車を運転したい、だから字が必要と言う長男の動機を捕まえ、漢字の意味・形等で遊んで知的興味を喚起、新出漢字を含む文章をすべての教育漢字を用いて作成、未習漢字にはルビ打ちをし、文章が完全に読めるようになってから文章全体を書かせた。きょうだいがいても一緒にせず、親子で対等な一対一で行う事で子どもも親も心の安定を得た。現在 40 歳の長男はフランス語と英語を使って国際機関に勤務している。



現在は家庭への普及と、このポリシーを引継ぐ「子どもの主体を起こす読み優先の漢字教育研究会」で先生方と共に活動している。

講評　発達障がいを持つ児童に効果的な家庭での漢字教育の貴重な実践記録である。最優秀賞の上野芳樹氏に引き継がれたように「読み優先」の漢字指導には応用できる普遍性がある。長年の地道な努力に深く敬意を表したい。

漢字の魅力を伝えるための授業づくり

福井県　鯖江市鯖江中学校教諭
真弓　恵子 氏

新学習指導要領の文言が、「指導する」から「理解し使うこと」へと変わり、生徒たちが今後の生活の中で、自ら考え効果的に表現できるようになるところまで、指導することが求められるようになった。

その中で、わが国の伝統文化である漢字の大切さや、いろいろな意味をもつ便利な文字の働きに気付かせ、文字を実生活の中で役立てることのできる生徒の育成を目指し、様々な実践に取り組んだ。【①教材の開発（10 分間の朝学習）　②筆ペン競書会（体育館での学年全員席上揮毫）　③学校祭の作品づくり（色紙に俳句）】

書く時間を増やし、いろいろな設定で、緊張感をもたせながら取り組んだことで、字を書くことへの抵抗感はどんどんなくなっていったように思う。授業後の感想をみると、書くことが身近なものになり、漢字のもつ魅力を肌で感じる生徒が増えてきている。今後も、我が国の伝統文化である漢字の素晴らしさを生徒たちに伝えていくため、学び続ける教師を目指していきたい。

講評　「筆ペン」の手軽さを武器に、「筆ペン競書会」や自作の俳句を色紙に書かせる授業実践等を通して、筆ペンを学校文化にまで高めようとする意気込みが伝わった。生徒たちもそれに応えるように、真剣に向き合い、文字を書くことを楽しんでいるように感じられた。